

## 博物館における体験的展示室の運営と課題

宮 平 真由美<sup>1)</sup>

### Management of the interactive exhibition room at the Okinawa Prefectural Museum.

Mayumi MIYAHIRA<sup>1)</sup>

#### 1. はじめに

沖縄館県立博物館・美術館が開館して2年が過ぎ、新館の開館に伴って設けられた「ふれあい体験室」にも多くの来館者が訪れている。この部屋は、全国的に博物館等における体験的な施設（体験室・体験コーナーなど）が増えているなか、沖縄県立博物館・美術館新館建設に伴い、新しくハンズ・オンの展示を取り入れた常設展示室（教育普及施設）として設置された。

本稿では、この2年間運営していく中で見えてきた「ふれあい体験室」の現状と、これからの課題・展望などをまとめてみたい。

#### 1. ふれあい体験室と体験キットの概要

「ふれあい体験室」（以下、体験室）は、博物館常設展示室の入口の側（無料ゾーン）にあり、ハンズ・オン展示（触れるなど五感を使って体験が出来

る展示）された資料を通して来館者同士、来館者と体験室スタッフ（以下、スタッフ）、また、“おきなわ”との「ふれあい空間」づくりをめざした部屋になっている。

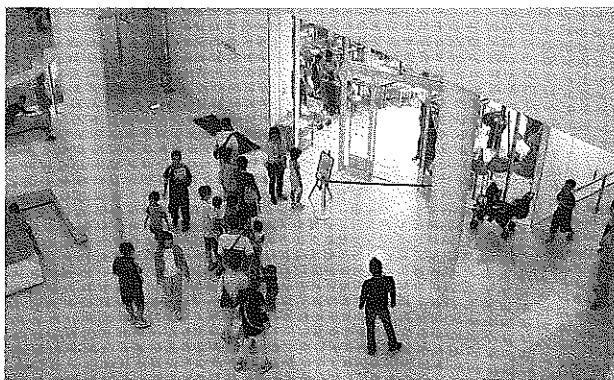
この体験室は、スペースや管理上の関係もあり、一度に入室できるのは最大30名としている。特に、入館者の多い時期の週末は、制限時間を設け、入れ替えを行なう日もある。

先に述べたスペースや管理上、学校の団体見学については利用を控え、一般入館者に優先して利用してもらっている。ただし、学校団体であっても少人数で、体験室が混み合っていない場合は、特に制限せず自由に利用できる様にしている。

体験室に配している体験キット（以下、キット）は、27種類（表1）あり、部屋のテーマである“沖縄の「自然のしくみ」・「先人の知恵」”に触る、見る、聞く、嗅ぐ等の五感を使って操作したり、組み立て



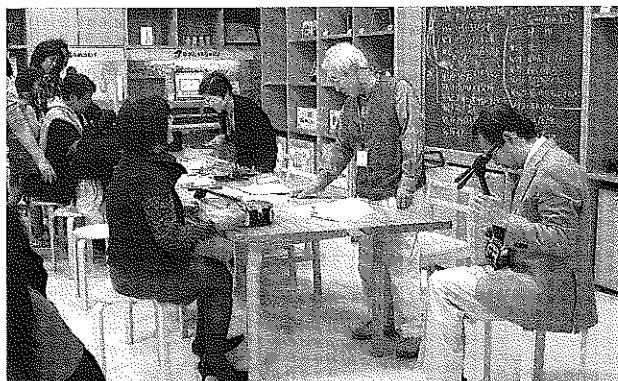
体験室外観



入室を待つ来館者

1) 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

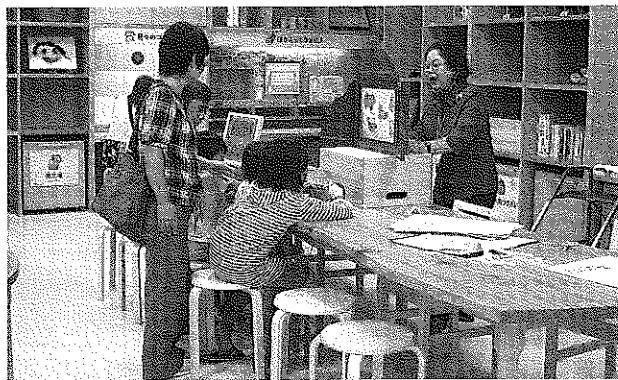
Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, Omoromachi 3-1-1, Naha, Okinawa, 900-0006 Japan.



三線を教えるボランティア



着付けをするボランティア



紙芝居を読むボランティア



馬グラーを教えるボランティア



体験室・キットの清掃を手伝うボランティアの方々



サインを探せ！探せるかな



すごろくで琉球の歴史をたどる



石積みをつくろう

るなどの遊びを通して興味関心を引き出し、学ぶことができるようになっている。これらのキットは、常設展示室で展開される沖縄の自然・人類・考古・歴史・民俗・美術工芸の各分野と関連し、キットを通して常設展示室の展示資料を補完し、また、フィールドへと導く意図で制作されている。

体験室やキットは、小学生を対象に制作されており、実際にキットに触ったり、組み立てていくなかで、そのモノを知り、興味や関心を持つきっかけや理解を深めることができればと考える。

## 2. 運営の方法

体験室の管理・運営は、常設展示室と同様に指定管理者が行っており、常に指定管理者のスタッフが配置され、利用者への対応・資料管理などを行っている。

しかし、キットなどの展示資料は県の収蔵品になるため、登録作業やキットの入れ替えなどは県の職員が計画して行なっている。

体験室は、利用者の体験空間であるが、博物館ボランティアの活動の場でもあり、利用者とキットを介してふれあう空間ともなっている。特に、利用者

が多い時には、スタッフ1人では対応が難しいため、ボランティアの方々のサポートは大きな力となっている。

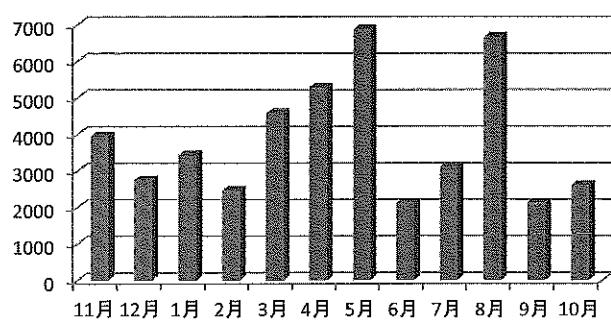
体験室は、利用者と地域のボランティアとの交流ができる場として、さらに博物館の展示室への窓口として貴重な展示室となっている。

ここでいう博物館ボランティアは、博物館が一般公募し、学芸員の養成講座受講後に本登録したボランティアの方々である。主に、学校見学の際のガイドや誘導・民具体験サポート、ふれあい体験室での来館者対応など教育普及事業をサポートしている。年に数回、体験室やキットの清掃の際にもお手伝いしてもらっている。

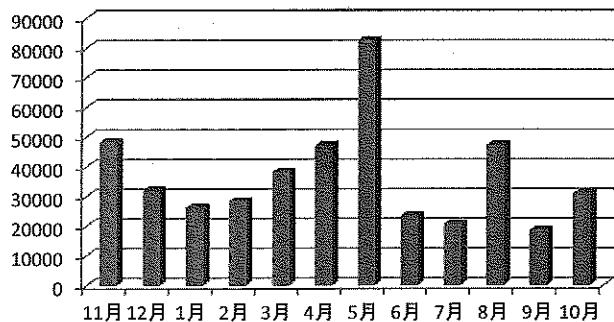
## 3. 利用状況

「ふれあい体験室」の開室時間は、午前9時から午後6時。館全体の一般来館者の入館と同様に、特に土曜日・日曜日の利用者が多い。

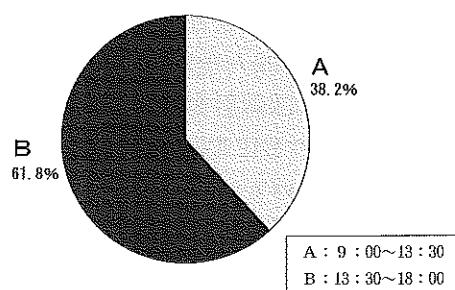
利用者の内訳を見てみると、親子連れが多く見られるが、子どもたちが友達同士で訪れたり、1人で来たりする子どももいる。体験室は、子ども達を対



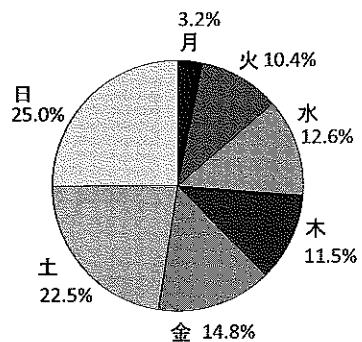
グラフ1 ふれあい体験室総入室者数



グラフ2 当館総入館者数



グラフ3 一日の利用時間帯



グラフ4 曜日毎の利用

象として設けられたが、大人にとっても充分楽しむものとなっているようであり、各年齢層の利用が見られる。

体験室の様子を見ていると、一度来たことのある子どもや何度も来たことのある子ども達は、慣れたもので、お気に入りのキットへと向かって行く。また、利用者が三線や三板（さんば）を上手に奏でていると、一気にこの場がステージになり歌い踊る方も出てくる等、とてもアットホームな空間になっている。

スタッフと利用者も顔なじみが増え、様々な交流も行われている。昔使っていた民具を当時の体験から懐かしげに話すお年寄りや、観光客を連れ、沖縄を体験できる場として案内する利用者もみられる。

また、体験室でキットに取り組んだ後にフィールドでの実体験を報告する子どもや、三線体験をきっかけに学校のクラブに所属した子どももいる。

来館者の利用の様子は述べた通りである。では、年間の利用者はどのくらいいるのだろうか。

開館2年目の2008年11月から2009年10月までの1年間の入館者数をグラフ（グラフ1）にしてみた。

体験室の入室者数は、一年で約46,000人であった。月毎にみると、3～5月と8月が多く、その中でも5月と8月は6,000人を超えており、利用者も増えたのだろう。5月のGW時には、2,310人と6日間で当月の33.6%を占めている。8月は、夏休みに子ども向けの展示会を開催しているため利用者が多かったと考える。

体験室の入室者数は、館の総入館者数<sup>(注1)</sup>（グラ



移動展でキットで遊ぶ子どもたち

フ2）との相関関係が見られる。

年間の総入館者数（44,304人）に対する「ふれあい体験室」の総入室者数（45,962人）をグラフ（1・2）で比較してみると、ほぼ同様の形をとっているのがわかる。体験室の入室者数は館の総入館者数の10.37%であるが、月平均では約3,800人の方の利用が見られ、館としては嬉しい限りである。

一日の利用者数（グラフ3）を見てみると、A時間帯（9:00～13:30）よりB時間帯（13:30～18:00）の利用が多い。午後の方が、来館者にとって動きやすい時間なのだろう。

曜日毎の利用（グラフ4）では、圧倒的に週末の利用が多い。土曜・日曜で全体の47.5%と約半分を占める。休みを利用しての利用が多いことがこのグラフから見てとれる。

#### 4. 体験キットの活用

体験室には、組み立てていくもの、奏でるもの、ゲーム感覚で体験できるものなど、様々な27種類のキットがある。これらは、部屋の中で利用者が自由にふれて体験できるものである。

27種類のキットの中でも人気のあるキットは、No.13「石で築く」、No.16「御三味（ウサンミ）」、No.18「島々のコトバ」である。これらの人気の理由としての共通点は、子どもから大人まで共に楽しめ、取り組むごとに仕上がりていき、最後は達成感を感じることができるからだと考えられる。さらに、「なるほど！」がついてくる。中でも1番人気のある「No.18島々のコトバ」は、それに加えてユーモアがたっぷりだ。

反対に、利用頻度が少ないキットは、No.7「い



路次楽の楽器を手にとる子どもたち

いろいろな木と草」、No.26「記録のくふう」である。これらは、キットとして「見る」ことから「取り組む」ことへ繋がりにくいということが要因だと考えられる。この点の改善を図らなければ、興味・感心を抱くチャンスを失っていくことになりかねない。その手始めの対応策として、ワークシート等を取り入れ、様子を見ながら対応し改善策を検討していく必要がある。

体験キットの一部はこの部屋を出て、移動展や出前授業、学校見学の際の体験ツールとして活用する場合がある。体験室だけがキットを体験できる空間ではなく、様々な場面で活用し、多くの方に利用していただき、博物館の展示物や沖縄の文化などへ興味、関心をいだくきっかけになればと考える。

さらに、昨年（2009年）は特別展「琉球使節、江戸へ行く！」の開催と並行し、関係機関の協力を得て、琉球使節が江戸へ行く行程で路次楽として演奏した楽器（復元）を借用し、体験室内で展示・体験させることができた。特別展示室で展示されている楽器と同様の資料を実際に手に取り、大きさや重さを体感し、叩いたりして演奏する体験をさせることができた。当館に収蔵していない体験資料を他館の協力をいただき、「ふれあい体験室」で展示できた事は、体験の活動を一步前進するものになったと思われる。

## 5. 体験キットの修繕・新規製作

開館して2年半を過ぎると、補修（修繕）の必要なキットも出てくる。キットは、実際に触れる事が前提となるため、製作の際にできる限り耐久性のある素材を使用し、形状などにも考慮して製作されている。だが、先に報告したように年間約46,000人が体験室を訪れ、キットに触れている事を考えると、補修が必要になることは仕方ないことだろう。現在は、簡単な補修や軽微なものであれば、スタッフが補修・修繕している。

破損状態がひどく再製作が必要なものも出てきているが、現在、体験室に係る修繕費はなく、そこまで行う事が出来ない。

しかし、体験キットは今後、現在のキットに加え、新しいキットの開発も進めなければいけないだろう。部屋に入って真っ直ぐにお目当てのキットを手に取

る子ども達もいるが、今のまではいずれ飽きられてしまうだろう。新しい内容のキットを制作し、新たな体験や体感を通して展示室やフィールドへと繋げていけるようにしていきたい。

現在、体験室には27種類のキットがあるが、常設展示室には、まだまだ多くの資料が展示されている。その全てを補完できる訳ではないが、ガラス越しでは伝えることのできない資料の本質に体験を通して体感し、興味・関心を持てるようなキットの開発をしていかなければいけないだろう。

## 6. 今後の課題と展望

ふれあい体験室の活用方法は、まだまだ様々な可能性があると思われる。展示会に併せたキットの開発、常設展や諸室、またはフィールドへ促すアプローチの方法 etc…

運営面では、補修・修繕、また新規キットの予算の確保があげられるだろう。その他にも、展示会にあわせたキットの開発は、展示会をサポートする意味で、ふれあい体験室の大きな役割を持つことになると思われるので、今後推進していくことが必要だと考える。

体験キットで、今後何よりも先に取り組むべきことは、先にも述べた通り新規キットの製作だろう。新館を造る際に試みた様に、博物館職員だけではなく、専門家、大学生<sup>(注2)</sup>、ボランティア、地域の方等、周りを巻き込みながら作っていくことも大切な事だと考える。博物館は県民みんなの財産である。皆に楽しく利用してもらえる様に働きかけることで、博物館へ愛着を持って訪れる方も増えるのではないだろうか。

その他にも、フィールドへの誘いも忘れてはならない。文化や歴史、自然は、私達の身の回りにあるものであって、それは特別なものではなく私達自身の中に生きづいている事に気づき、“おきなわ”とふれあってほしい。

「ふれあい体験室」は、今後も利用しやすい空間を作ることはもちろんのこと、来館者とスタッフ、キットとの“ふれあい”を通して、博物館の展示資料や沖縄の自然・文化・歴史に興味関心を持ってもらえる場所作りを目指していかねばならない。

「ふれあい体験室」の活動は、始まったばかりである。今後、色々な意味で“ふれあい”的場として発展していく様、多くの方々の協力を得ながら、「ふれあい空間」を作っていくたい。

本稿を書くにあたって、統計をとっていただいた西平善一氏・屋良さやか氏・松本京氏（交流員）、体験室の状況について教示していただいた渡部貴子氏（交流員・ふれあい体験室担当）、助言をいただいた與那嶺一子氏（県学芸員）、中村愛氏（指定管理者教育普及担当）に厚く御礼申し上げる。

注1 総入館者数は、博物館・美術館の無料ゾーンも含めての建物への入館者になるため、博物館展示会を観に来た方の総数ではない。

注2 大学生との製作については、「体験キットをつくる—沖縄県立芸術大学の学生達との教育普及プログラムの試みー」『博物館紀要1号』で紹介されている。

#### <参考文献>

與那嶺一子 「体験キットをつくる—沖縄県立芸術大学の学生達との教育普及プログラムの試みー」『沖縄県立博物館・美術館紀要1号』 沖縄県立博物館・美術館 2008

表1 体験キット製作リスト

製作の意図				製作の視点(ポイント)	ジャパン
本体	小 マ	細 タイトル			常設展示シングル
生物界	1	サインを見逃すな!	容易に姿をみることが出来ない動物について、かれらの痕跡からその存在と暮らしぶりを知り、観察や研究する樂しさを知る。	「フィールドデザイン」とはどのようなものがあるのでしようか。フィールドデザインからすることはなんでしようか。	
	2	小さな世界～小さな仕事～	日暁は意識しない場所でも生き物の世界があることを知る。自然界における小さな動物たちとの後副と人間関係について考える。	葉っぱの下にはどのような生き物の世界があるのでしようか。そこにはどんな動物がいてどんな生活をしているのでしようか。	
	3	耳をすませば	日常生活でよく聞いている生き物たちの様々な鳴き声や音を知り、動物たちの世界や、自然環境について考える。	生き物たちの声や音にはどのようなものがあるのでしようか。また、それなどのよくなれる声があるのでしょうか。	島々の成り立ちと生物相の形成
	4	この骨だれの?	動物たちの骨格から、その違いや類似点を知り、命の不思議を考える。	動物たちの骨格はどうしているのでしようか。同じ機能でも形が違うのはどうしてでしょうか。	自然史
	5	サンゴと生きる	サンゴ礁と、そこに生息する生き物たちの共生について知る。また、サンゴ礁のしくみを知り、人間界との関わりや影響について考える。	サンゴ礁にはどんな生き物がどのように生活しているの	
	6	いろいろなタネ	身近な木や草のかたちをを通して植物の個性を知り、觀察や探求する樂しさを知る。	タネのかたちや散布方法にはどのような種類があり、それぞれの形にはどんな意味があるのでしょうか。	
	7	いろいろな木と草	身近な木や草を知ることを知る。	草木のかたち、太さ、重さ、大きさ、強さは全て同じでしょうか。また、木(車)だと石の種類にはどんなものがあり、沖縄の特徴はなぜ白く、星砂とはなんなのでしょうか。	
	8	いろいろな石と砂	沖縄列島を構成している地表の石や砂から、地域を知る。	石や砂の正体を探ってみましょう。	
	9	見える星座・見えない星座	沖縄で見られる四季の星座を知る。また、環境の変化が天体に与える影響について考える。(光害、大気汚染 等)	金星座88のうち、沖縄では88を見ることができませんが、目視できるものとできないものがあります。それはどうしてでしょうか。	
	10	化石～生きていた歴～	化石の定義や見方を知り、現在に生きる自分たちとどのような関わりがあるかを考える。	化石とはなんででしょうか。化石を開べると何がわかるのでしようか。	
自然のしくみ	11	港川人	港川人と現代人の形質のちがいを考える。	港川人とは何がどう違うのでしょうか。港川人は、いつ、どこからやってきたのでしょうか。	
	12	土質と出土品からわかる歴史のなぞ	土質面から、遺構や年代を知る。発掘された遺物から、先人の知識を読み解く。	土の重なり方や、土の状態から分かることはなんでしようか。沖縄の発掘現場から出土した遺品(骨器、貝殻品、土器等)は遺器(他)にはどのようなものがあるのでしようか。	
	13	石で強く	石を利用してきた人々の知恵と工夫を、石造建築物から考える。	グスクの石組みの特徴と意味にはどのようなものがあるのでしょうか。昔の人の知恵をさくってみましょう。	時代をさしむける
	14	マチガスイ	植物を食に取り入れた先人の知恵を知る。	沖縄で代表的な食の薬材(有用植物)にはどんなものがあるのでしょうか。	
	15	イノ～～海の食糧～	「海の烟」と呼ばれるイノーと食の関係を通して、身近な生活から自然と人間の深い関わりを考える。	「海の烟」と呼ばれるイノーがどのようなところで、なにをどう利用してきたのでしょうか。	
	16	御三味(ウサンミ)	生活の中で伝えられたご馳走の食文化や調理法、その源を考え、沖縄の食生活の一面について理解する。	オジイやオバアがご馳走と思っているものはどんなものでしようか。また、それらがなぜご馳走といわれるようになつたのでしょうか。	
	17	いろいろな道具	道具を通して、人々の知恵と工夫を考える。	人々が考え出した道具にはどんなものがあるのでしょうか。沖縄の風土、環境、人々の暮らしから、どのような工夫がみられるでしょうか。	
先人の暮らし	18	島々のコトバ	島々によってちがう言葉の多様性を知る。	自分たちのしま(島・地域)と、他のしまでは、語彙、intonationにどんな違いがあるのでしょうか。	
	19	いろいろな玩具	沖縄玩具(遊び)を通して自然素材を利用した人々の工夫や、先人が玩具に託した願いや思いを知る。	島の玩具にはどのようなものがあったのでしょうか。遊びのシチュエーションや、世代間のコミュニケーションについて考えてみよう。	
	20	いろいろな楽器	“沖縄の楽器”音に触れることを通して、楽器の素材や形、沖縄人の音楽性(音感・旋律)を知る。	沖縄の楽器はどんな種類があるのでしようか。また、どのように伝わったのでしょうか。	
	21	衣からわかること	沖縄の風土と人々の感性によって革われた“衣”を通して、先人が玩具に託した願いや思いを知る。	織り物・染め物の、糸・織機・染め・模様にはどのような種類があるのでしようか。	
	22	施物～かたちのわけ～	生活にまつわる施物を通して、大きさやかたち(形状)の工夫について考える。	また、琉球にはどのようなものがあつたのでしょうか。	かたちと色
	23	漆	沖縄の気候風土と文化によって培われた琉球漆器の加飾方法や文様を知る。	III. 鈴、壺、壺などの大きさやかたち、色はどうしてできたのでしょうか。	工芸
	24	印かんつてあなたに?	ささざな印かんの形と使われ方を通して、その後割を知る。	印かんは、誰が何に使つたのでしょうか。	歴史
国の人々	25	島のかたち	いろいろな琉球の地図を通して、当時の人々の世界觀を知る。	琉球の地図にはどんなものがあるのでしょうか。	
	26	記憶のくふう	昔の数の記憶方法を通して、先人の知恵を知る。	ワザーンやスチーブナーとはどんな記憶方法でしょうか。	
	27	国々とのおつきあい	モノを通して琉球と外国との交流の様子をしらべる。	琉球は、どのような国々と、どのような交流をしてきたのでしょうか。	王族と民族